

山頭火コレクション

(第4巻)

使用方法

目次の操作方法

表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わるので、ここでクリックすると該当のページまでジャンプします。

本文から目次へのジャンプ方法

本文ページの右上にボタンがあります。
これをクリックすると、目次のページまでジャンプさせることができます。

目次

行乞記(三)	一
其中日記(一)	一四
其中日記(二)	二五
解説(大山澄太)	三六

行乞記
(三)

鶏肋抄

□ 霰、鉢の子にも(改作)

□ 山へ空へ摩訶般若波羅密多心経(再録)

□ 旅の法衣は吹きまくる風にまかす(〃)

雪中行乞

□ 雪の法衣の重うなる(〃)

□ このいたぶきのしぐれにたゞずむ(〃)

□ ふりかへる山はぐれて(〃)

□ 水は澄みわたるいもりいもりをいただき

□ 住みなれて寛あふれる

鶏肋集(追加)

□ 青草に寝ころべば青空がある

□ 人の子竹の子ぐいぐい伸びろ(酒壺洞君第二世出生)

六月一日 川棚、中村屋(三五・中)

曇、だんく、晴れて一きれの雲もない青空となつた、照りすぎる、あんまり明るいときへ感じた、七時出立、黒井行乞、三里歩いて川棚温泉へ戻り着いたのは二時頃だつたらうか、木下旅館へいつたら、息子さんの婚礼で混雑してゐるので、此宿に泊る、屋号は中村屋(先日、行乞の時に覚えた)安宿であることに間違はないが、私には良すぎるときさへ思ふ。

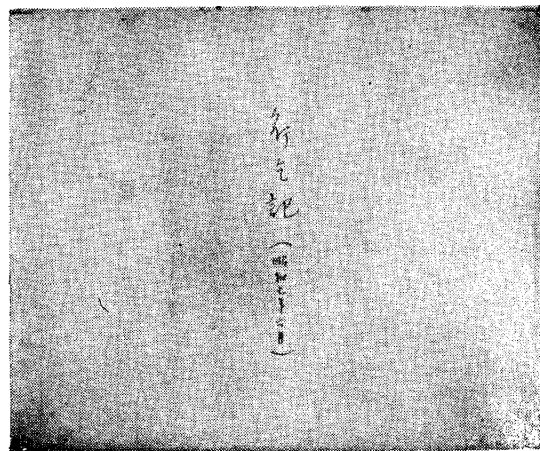
すべてが夏だ、山の青葉の吐息を見よ、巡査さんも白服になつた、昨日は不如婦を聴き今日は早松茸を見た、百合の花が強い香を放ちながら売られてゐる。

笠の蜘蛛! あゝお前も旅をつづけてゐるのか!

新らしい日、新らしい心、新らしい生活、——更始一新して堅固な行持、清浄な信念を欣求する。樹明君からの通信は私をして涙ぐましめた、何といふ温情だらう、合掌。

・ ほうたるこいほうたるこいふるさとにきた

〔自筆ノートリその五 写真はその第一頁(扉)である。昭和七年六月一日より、八月七日に至る間の川棚温泉滞在記である。扉裏に上記の句が記されている。〕



此宿はよい、ていねいでしんせつだ、温泉宿は、殊に安宿はかういふ風でなければならぬ、ありがたい。

六月二日 同前。

雨、そして関門地方通有の風がまた吹きだした、終日、散歩（土地を探して）と思案（草庵について）とで暮らした。

午後、小串へ出かけて、必要欠ぐべからざるものを少々ばかり買ふ。

山ほととぎす、野の花さま。

老慈師から、伊東君から、その他から、ありがたいよりがあつた。

隣室の奥さん——彼女はお気の毒にもだいぶヒステリックである——から御馳走していただいた。自己を忘す——そこまで徹しなければならぬ。

こゝはうれしい、しづかにしてさびしくない。

だん／＼酒から解放される、といふよりもアルコールを超越しつゝある、至禱至祝。

緑平老から貰つた薬を、いつのまにやら、みんな飲んでしまつた、私としては薬を飲みすぎる、身心がおとろへたからだらうが、とにかく薬を多く飲むほど酒を少く飲むやうになつたわい。

昨夜はよく寝られたのに、今夜はどうしても眠れない、曉近くまで読書した。

家をさがすや山ほととぎす

月草いちめん三味線習うてゐる

・ ばかり落ちてきて虫が考へてゐる

・ 旅のつかれの夕月がはつかり（改作再録）

六月三日 同前。

雨、まるで梅雨のやうだ、歩いたり、考へたり、照会したり、交渉したり……、たゞ雨露を凌ぐだけの庵を結ぶのもなかくである。

早朝、雷雨に起きて焼香し読経する。

温泉饅頭を坊ちやんに、心経講話をババに送つてあげる（伊東君にあてゝ）。

夕方、一風呂浴びて一本傾けて、そしてぶら／＼歩く、こゝにも温泉情調はある、カフェーと自称するもの二軒、百貨店と自称するもの一軒、食堂二三軒、そこかしこに三味線の音がする、……いやまて、ビリヤード二軒、射的場も一軒ある。……

妙青寺拝登、長老さんにお目にかゝつて土地の事、草庵の事を相談する（義庵老慈師の恩寵を感じる）、K館主人にも頼む、すぐ俳句の話になる、彼氏も一風かはつた男だ、N館主人も頼む、彼は何だか虫の好かない男だ、とにかく成行に任せる、さうする外ない私の現在である。